



日本三大仏 高岡大仏の彫刻家

中野 双山 (1881~1940)

双山は、明治14年(1881)、中野又次郎の長男として射水郡高岡町定塚町(現高岡市定塚町)に生まれた。明治27年(1894)に入学した富山県工芸学校鑄銅科(現県立高岡工芸高校)で鑄物の原型の作り方を学ぼうと、銅器の彫刻家になりたいと考えた。明治36年(1903)に東京美術学校(現東京藝術大学美術学部)に進み、木彫などを学んだが、明治38年(1905)に学校を中退し高岡に戻ってきた。

明治30年代後半、明治33年(1900)6月の大火で焼けてしまった木造の高岡大仏を、燃焼しない青銅で作直そうという機運が高まっていた。母校の工芸学校で教師をつとめる傍ら原型師の仕事に携わっていた双山に、明治41年(1908)頃に「高岡大佛再興事務所」より高岡大仏の原型づくりの依頼があった。双山が27歳の時であった。当時、「原型師」の専門家は地方の小都市にはほとんどいなかった。この高岡大仏の再建には、第6代高岡市長松島喜五郎の名も連ねており、青銅による大仏は地場産業の振興策として格好の事業でもあった。双山は大仏原型製作という郷土の期待を背負って依頼を引き受けた。

明治42年(1909)頃から、双山は大仏製作の着想を得るため全国行脚に出た。奈良大仏をはじめ、各地の数多くの仏の姿に触れた双山は、仏の壮大さとその優れた建造技術に心打たれ、「穏やかな表情の御仏を作ろう、そのような御仏こそが高岡の風土にふさわしい」と考えるようになった。大仏製作に着手した双山は日々製作に没頭し、明治44年(1911)9月には、大仏の頭部を完成させた。しかし、その後は資金が足りないなどの理由で作業はたびたび中断した。ようやく開眼式を迎えたのは、大火以来実に33年、高岡大仏復興事務所の趣意書が出されてから26年を経た、昭和8年(1933)5月であった。

大仏の頭部を完成させた後、双山は県内各地の像製作の傍ら、書画の製作や作陶、富山県立工芸学校の初代同窓会長を務めるなど趣味や人の世話にも熱心であったが、昭和15年(1940)9月5日に一生を終えた。享年59歳。

高岡市民は、双山没後も大仏に手を加え続け、高岡大仏落慶法要が行われたのは昭和56年(1981)であった。高岡大仏は原型・鑄造とも高岡工人の手によるもので400余年の伝統を誇る高岡銅器の象徴となっており、総高15.85m、重量65tというスケールの大きさは圧巻である。この高岡大仏は奈良、鎌倉と並ぶ日本三大仏に数えられ、現在も高岡の象徴として市民に愛され続けている。

専門員 福田 暁

平成29年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



社会から得た利益を社会へ還元した「丸井」の創業者

青井 忠治 (1904~1975)

明治37年(1904)、射水郡小杉町(現射水市)に生まれた。青井家は旧家であったが、父の破産や両親の離婚、2歳の時の自身の左目失明、相次ぐ父母との死別等、不運な幼少年期を送った。

大正11年(1922)、県立工芸学校を卒業し、東京芝の家具の月賦販売「丸二商会」に入社。昭和6年(1931)、暖簾分けて「丸二商会中野店」を開店した。月賦販売に対する悪評を拭い去りたい一心で、良品を大量に仕入れてコストを抑え、安く提供し売上を伸ばした。昭和10年(1935)、阿佐ヶ谷に出店し、「丸二」から「丸井」へ改称。昭和12年(1937)には株式会社化した。昭和35年(1960)には、「月賦」を「クレジット」と言い換えて、日本で最初のクレジットカードを発行した。「景気は自らつくるもの」という商売哲学の下、昭和40年(1965)に東証一部に昇格し、5年後には月賦百貨店業界のトップ企業に育て上げた。

事業への飽くなき挑戦の一方、“一生をかけて得られた私財を惜しみなく社会へ還元する”という崇高な理念のもと、母校に記念館・文庫などを寄贈したほか、奨学基金を設立するなど、郷土の発展に貢献した。

専門員 平野 強